

吉野屋の文化財建造物群について

About the Yoshinoya (Japanese-style inn) as a Cultural Property
Wooden Buildings

キーワード：

吉野屋
旅館
近代和風建築
浜松市
登録有形文化財

抄録

本稿は吉野屋の建造物群の文化財的価値について報告する。吉野屋は浜松市北区細江町気賀に位置する料理屋、旅館である。調査対象は4棟からなり、昭和初期から中期にかけてつくられた近代和風建築である。

1. はじめに

本稿では浜松市北区細江町気賀に位置する吉野屋の建造物群の文化財的価値について報告する。筆者らは2012年秋から当該建造物群について建築史的な調査を行い、所見、図面等を作成した¹⁾。これに基づき当該建造物群は国登録有形文化財となった(2015年)。ここではその知見を報告し、地域の文化財建造物理解の一助となれどと願う次第である。

2. 沿革と概要

吉野屋は、気賀の町に位置する料理屋、旅館である。東海道の脇街道である姫街道の宿場町であった気賀は、関所が置かれ、浜名湖北岸の交通の要衝であった。当該敷地は、関所から地続きであり、当地を治めた旗本気賀近藤家の陣屋跡の最奥にあたる一角で、池のある庭は当時の遺構であるという。

吉野屋は大正時代に野末邑次郎が経営していたが、その後板前であった野島勘作に譲渡されたといわれ、現状の建造物群は後述のように昭和初期から中期にかけて野島勘作が施主となったものである。勘作の長男で日本画家の野島青茲(1915(大正4)年-1971(昭和46)年)の生家でもあり、一時期は文化サロンの役割も果たしていたという。

1949(昭和24)年に作成された略図があり、それによれば敷地は現在よりもはるかに南に広く、南側には2階建ての客室棟などがあった。北側にも今より広く数棟の離れがあった。その後、現状の主屋が新築されて、事務・厨房・浴場等の機能が南側からこの建物に移り、1955(昭和30)年頃までには順次縮小していったという。現状の客室棟は、かつて敷地の奥に位置していた数棟の離れの一部であり、上客用の別棟のみが残されていると考えることができる。

¹⁾ この調査は次の調査員によって実施した。土屋和男(常葉学園大学造形学部)、平野克典(平野克典建築設計事務所/静岡県文化財建造物監理士)、和田厚(和田材木店/常葉大学非常勤講師)(所属はいずれも2012年当時)。資料収集、図面作成等を平野が行い、建築材料について和田の助言を得た。

現状は西側の公道から下り坂でアプローチし、まず南側に事務・厨房・経営者宅となる主屋が位置する。その向かいに北棟(「日の出の間」、「萩の間」および「松の間」)、さらに南東の池を囲むように南棟(「亀の間」)、東棟(「桐の間」)が位置する。これら計4棟が、今回の対象となる建造物である。

静岡県近代和風建築総合調査時の聞き取りによると、それぞれの建造年は次のとおりである。

「松の間」：1927-28(昭和2-3)年

「桐の間」：1927-28(昭和2-3)年

1950(昭和25)年増築

「亀の間」：1933-34(昭和8-9)年

「日の出の間」、「萩の間」：1935(昭和10)年

(「松の間」へ増築)

主屋：1950(昭和25)年

同じく聞き取りによれば、大工は石原光次郎というが、この人物の詳細は明らかではない。なお、今回の調査では棟札等は発見できなかった。

いずれの「間」も専用の玄関をもち、基本的に座敷と次の間の2部屋から構成されているが、それぞれに間取り、外観、内部造作がすべて異なっており、別棟の相違を意図的に演出している。多くの銘木、唐木(一部は突板を使用)が使われているが、それらを使い分けることによって、各棟の雰囲気、趣味に変化を与えている。一時的に滞在する施設のためか、住宅よりは手の込んだ、やや非日常的な意匠が見て取れる。

主屋を除く各棟は旅館の離れとして建てられたために、類似した大きさの建物の集合体となっており、日本庭園とともに独特の景観を形成している。いずれの棟からも、そこから庭を見るだけでなく、庭と一体になった別の棟が視界に納まる。

昭和初期に旅館として建てられた建物が、特段の変化も受けることなく、その姿を存続させているのは希有なことと考えられる。

3. 主屋

木造2階建て、切妻瓦葺き下屋付で、外観は他棟と異なり一般住宅に類似している。2階の高さが抑えられてい

るので一見平屋に見える。1950（昭和25）年に建てられた。

北側東寄りに玄関を取り、主にここより東側が旅館のサービス機能、西側が経営者の住宅となっている。平面は中廊下で南北に分けられ、南東側に厨房、配膳、土間があり、さらにもっとも客室側の渡廊下に面して湯殿が配されている。中廊下から続く階段で2階に上がると、東側に和洋2室があり、残りの大半は天井を張らず倉庫となっている。

この棟で特筆すべきは北東の応接間で、椅子座の洋間であるが、長押や格天井が用いられている。壁は長押より上を砂壁、下を葛壁としている。天井、壁の仕上は隣室の帳場と連続している。応接間の北側にはこの建物の入口と東側の渡廊下とをつなぐ土間があり、ここからドアで室内に入れるようになっていて、部屋はこれに合わせるように角が斜めに切られている。玄関および応接間付近の外壁は一部が茶色い種石の洗出しとなっている。

4. 北棟「松の間」「日の出の間」「萩の間」

木造平屋、入母屋瓦葺きの「松の間」が1927-28（昭和2-3）年に建てられ、これに木造2階建て、切妻茅葺き、一部瓦葺きの「日の出の間」、「萩の間」が1935（昭和10）年に増築された。

「松の間」部分は、銅板葺の庇が付き、外壁に特殊な左官仕上がなされ、ガラス戸には磨りガラスと結霜ガラスが用いられており、いずれも古写真と変わらず、建設当初のものと思われる。「松の間」は西側に玄関をもち、次の間6畳、座敷8畳からなる。玄関付近はガラス引戸に「日の出の間」のそれと同様の意匠が、庇裏に「萩の間」と同様の籠目が見られ、この部分は増築と同時期に手が加えられたと見られる。室内の柱は角柱で床柱のみ絞丸太が用いられ、床脇は檜板の上部に窓が開けられている。天井は杉杣目板に猿頬の棹縁、壁は床内のみ葛壁で、他は土壁であるが、土壁は1973（昭和48）年の後補という。座敷と次の間の小壁には欄間はなく、縁側との小壁には箆欄間が嵌められている。やや数寄屋風の意匠で銘木が用いられているが、比較的すっきりとしたおとなしい造作の部屋である。

「日の出の間」、「萩の間」部分は、急勾配の茅葺き屋根が目をはく田舎家風の外観である。これは昭和初期の近代数寄者らの和風邸宅での田舎家の流行を受けた意匠と見られ、実際の民家としては存在しない独特な姿である。古写真では棟飾が載り、妻面には竹格子の窓が開けられていたことがわかるが、これらの箇所は昭和50-60年代に改修され銅板に改変されている。他はガラス戸等を含めてほぼ古写真のとおりである。

1階「日の出の間」は、南側に玄関をもち、玄関の間2畳、次の間6畳、座敷8畳に加え、次の間横の4.5畳、および便所、洗面所を備えた最も充実した「間」である。室

内の柱は8畳の床寄りだけが丸太となり、その他は角柱となっている。床柱は姥目檜という。床脇は地袋の上を楓板とし、網代天井の廻縁を煤竹としている。8畳の天井は浮造りの杉杣目板に皮付丸太の棹縁である。壁は土壁であるが、これは「松の間」と同様の後補である。欄間には丸い節の目立つ板を用いて節を意匠的に見せている。

2階「萩の間」は、「松の間」との間にある専用の入口から階段を上がり、次の間6畳、座敷8畳からなるが、間取りは1階「日の出の間」と南北が逆転し、2階に専用の便所を備えている。8畳の床廻りは下げ束の奥に床柱が立つ構成で、床柱は山躰躰という。次の間にも床を備えている。2間とも天井は板目板に竹の籠目を被せ、吹き寄せの棹縁で支えている。欄間には水中で浸食を受けた古材が嵌まり、籠目の天井とともに、浜名湖に近い立地から漁のイメージを演出したのだろうか。壁は葛壁で床内だけが黒い色調になっている。この増築部では、1、2階とも、各所に珍しい材料と数寄屋風の手の込んだ仕上が見られ、過剰ともいえるほどに意匠に心が砕かれている。

5. 南棟「亀の間」

木造平屋、寄棟瓦葺きで、1933-34（昭和8-9）年に建てられた。北側に主屋から続く渡廊下があり、この東側に玄関がある。玄関付近の外壁は一部が洗出しとなっているが、主屋のそれとは異なり、大粒の数色の玉砂利が用いられており、建設当初からの仕上と思われる。

次の間4.5畳、座敷8畳に便所が付属する間取りで、居室の天井高は9.6尺とかなり高い。これに応じて外観も高くなり、濡縁廻りに出の長い庇が桁を送って持ち出されている。室内の柱は角柱で、床廻りは下げ束の奥に桜皮付の床柱が立ち、黒檀突板の床框が矩折に取り付く。この構成は「萩の間」と似ている。壁は長押より下が黒い色調の葛壁、上が鼠色の砂壁で、書院風の造作と相まってやや硬い重厚な雰囲気のある部屋である。

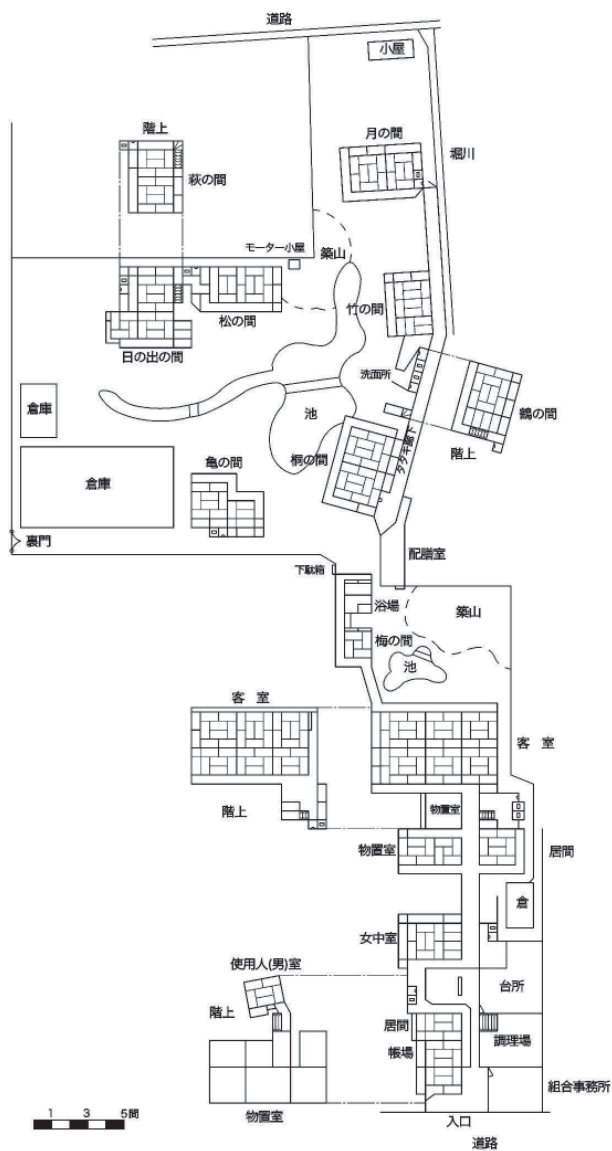
6. 東棟「桐の間」

木造平屋、入母屋瓦葺きで、1927-28（昭和2-3）年に建てられた。南棟から続く渡廊下を介して、南側に玄関がある。当初は次の間10畳、座敷10畳であったが、1950（昭和25）年に北側に10畳が増築され、計30畳の大広間となっている。さらに北側には平成7年に便所が増築されている。外観は10畳3室が一棟の入母屋に納まり、目の池に張り出す幅の広い濡縁の上に庇が差し掛けられている。

室内は次の間、座敷ともに10畳という広さに対して木割りが細く、軽い印象を受ける。床廻りは床柱に黒檀丸彫、床框に紫檀、落掛に鉄刀木、床脇壁に瓢形の穴を開け古木を嵌め込んでいる。壁は床内のみ葛壁、他は鼠色の砂壁である。天井は丸い節の目立つ板、欄間には煤竹が用

いられている。縁側は池に面して全面ガラス戸となり、明るく軽快な部屋である。

参考文献：『静岡県の近代和風建築』静岡県教育委員会、2002年



1949（昭和24）年「飲食業臨時規制法に依る許可申請書」添付書類を新たに描き直した図



古写真（大正～昭和初期か）姫街道沿い



古写真（1931（昭和6）年）野島青茲と妹たち。後方に桐の間



古写真（1935（昭和10）年より以前）後方に松の間。日の出の間と萩の間はまだない



古写真（時期不明）姫街道側入口 上の図の右下から奥を望む（現存しない）



古写真（1963（昭和38）年）日の出の間と萩の間。



西側アプローチ 右に主屋



東棟から北棟を見る、右に平屋の「松の間」、
左に1階「日の出の間」、2階「萩の間」



池の北から南棟「亀の間」を見る



北棟2階から望む、庭を囲むように各棟が配される



池の北から左に東棟「桐の間」



北棟前から右に主屋、左に南棟「亀の間」



北の築山と北棟「松の間」



主屋1階、応接間



北棟、南面、右に平屋の「松の間」、
左に1階「日の出の間」、2階「萩の間」



南棟、北面「亀の間」



北棟平屋部「松の間」



南棟「亀の間」



北棟1階「日の出の間」



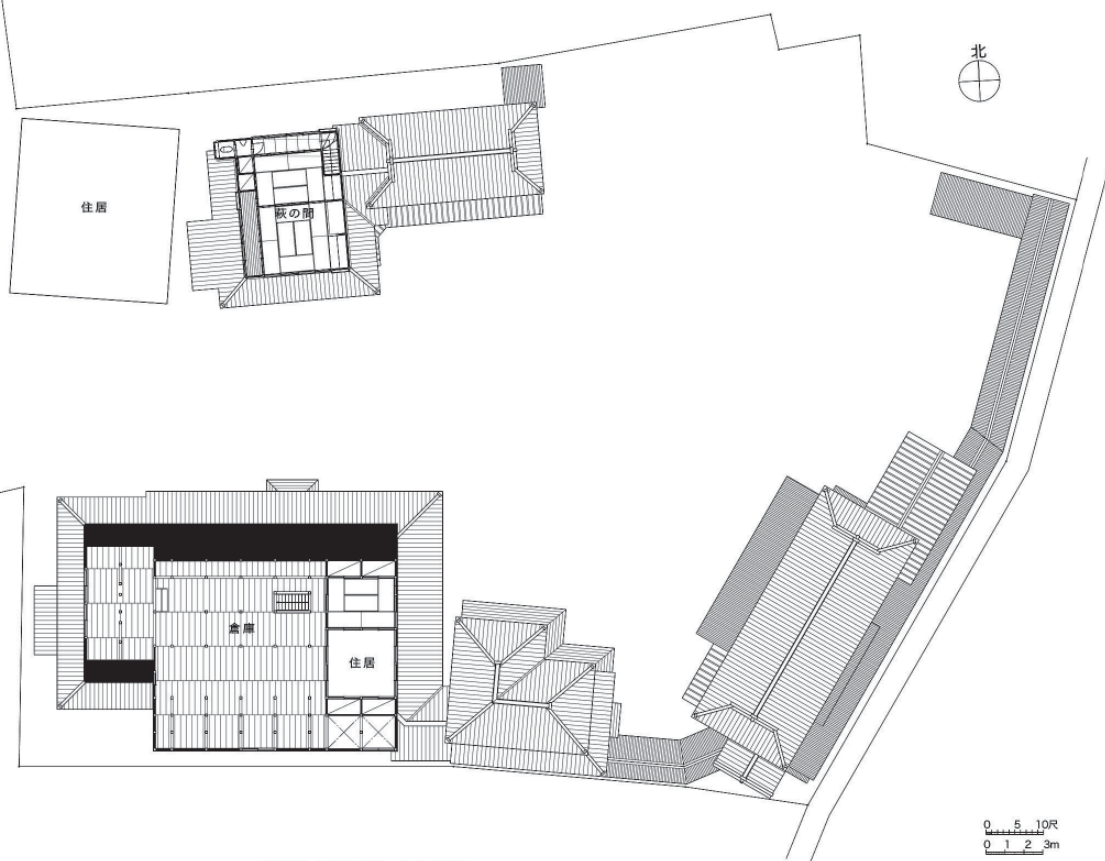
東棟、北西面「桐の間」



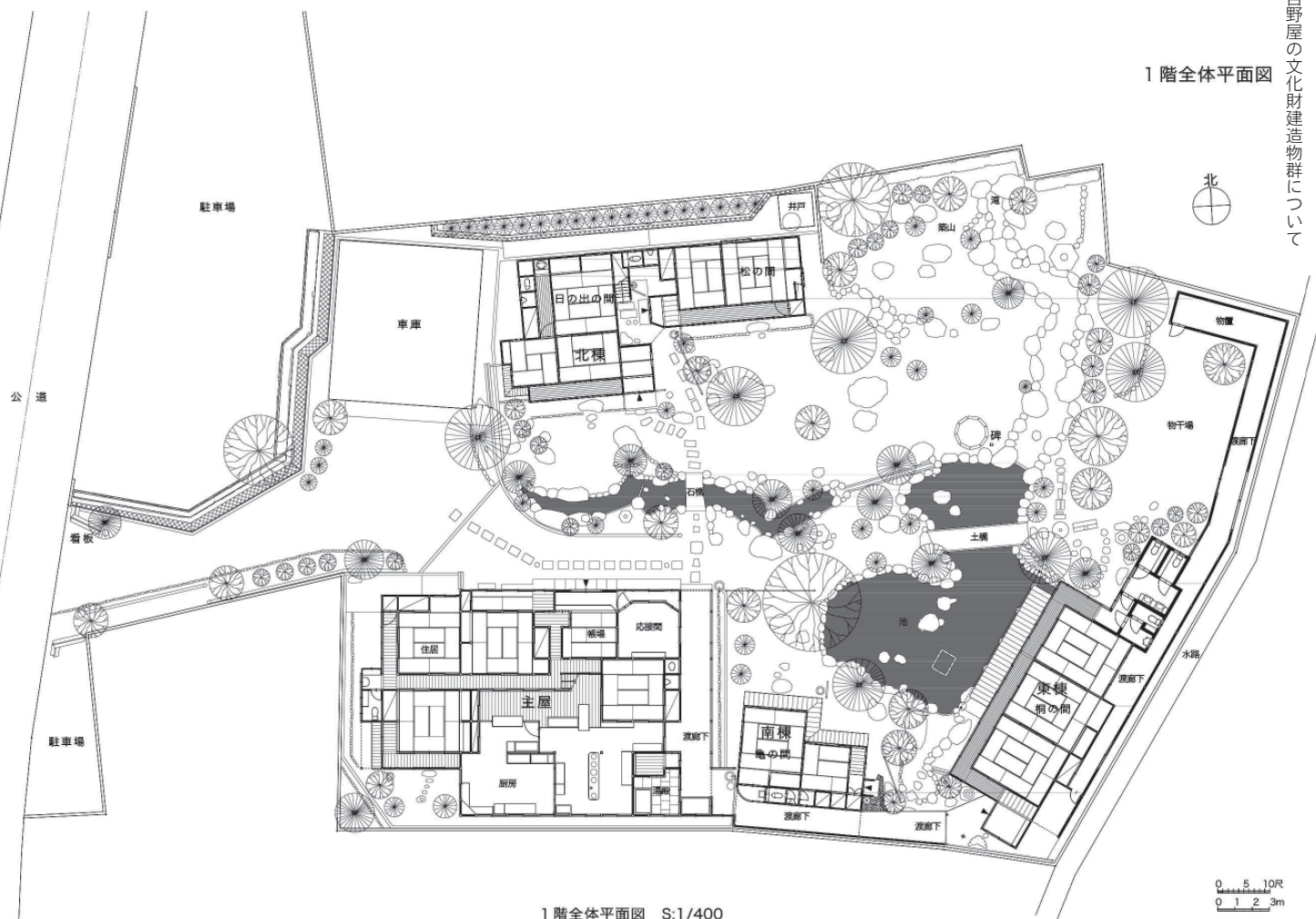
北棟2階「萩の間」



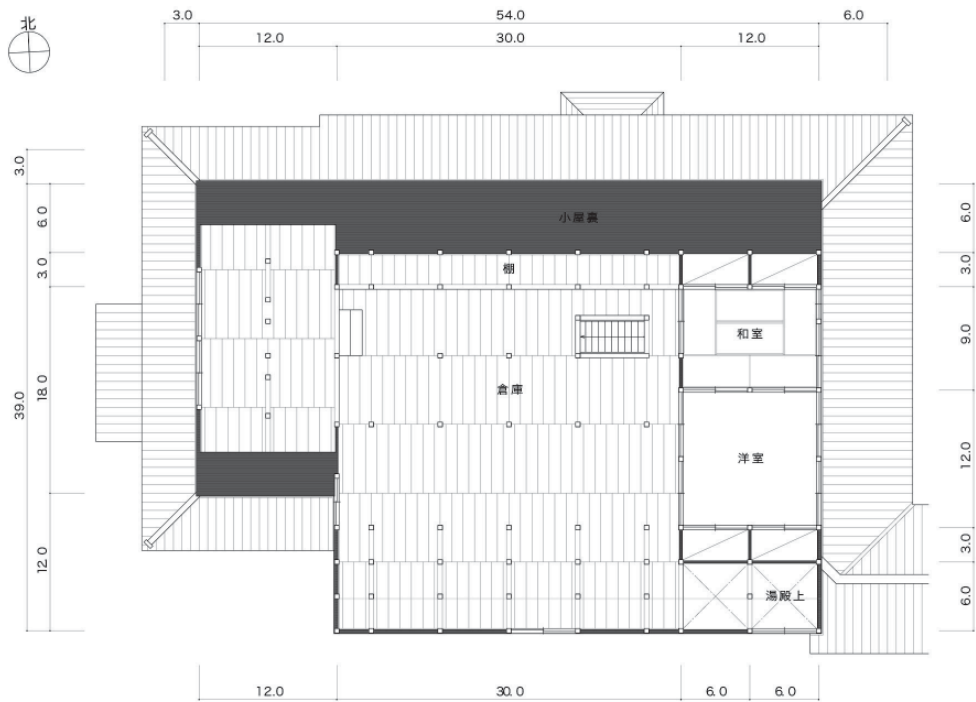
東棟「桐の間」



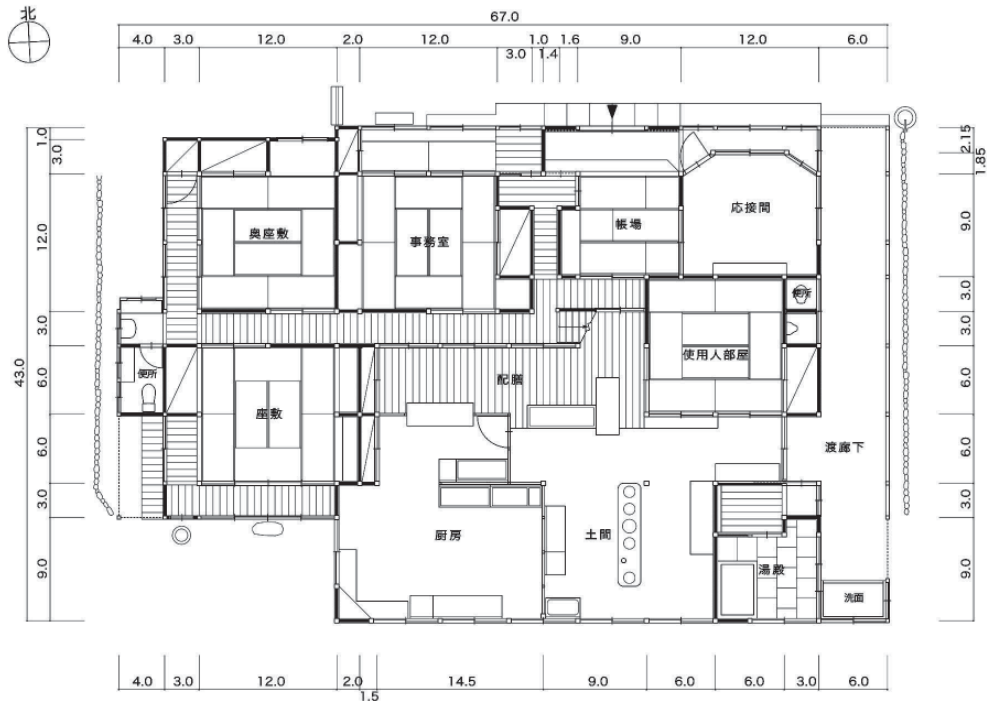
2階全体平面図 S:1/400



1階全体平面図 S:1/400



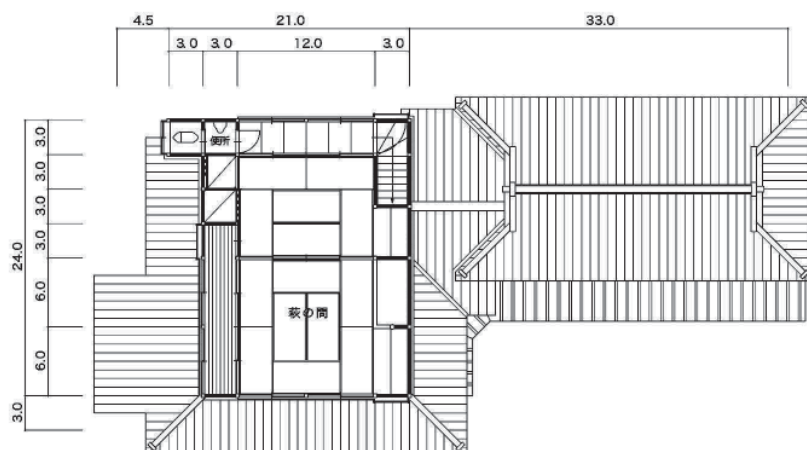
2階平面図 S:1/200 (単位:尺)



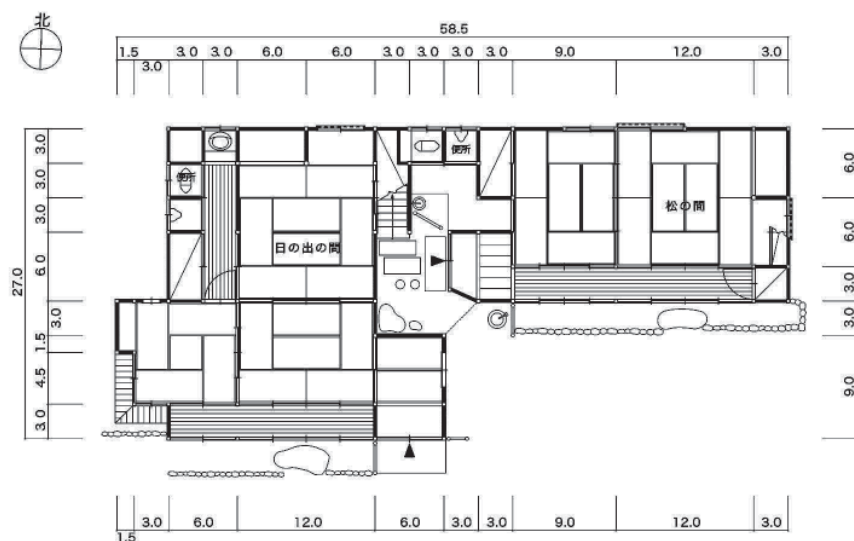
1階平面図 S:1/200 (単位:尺)



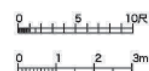
北棟 平面図



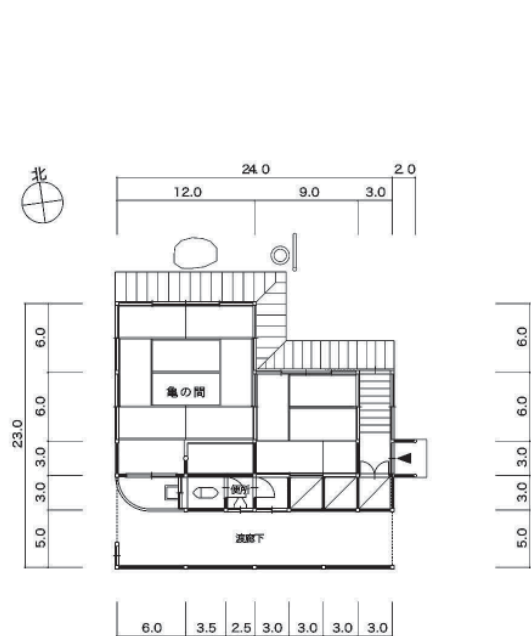
2階平面図 S:1/200 (単位:尺)



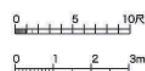
1 階平面図 S:1/200 (単位:尺)



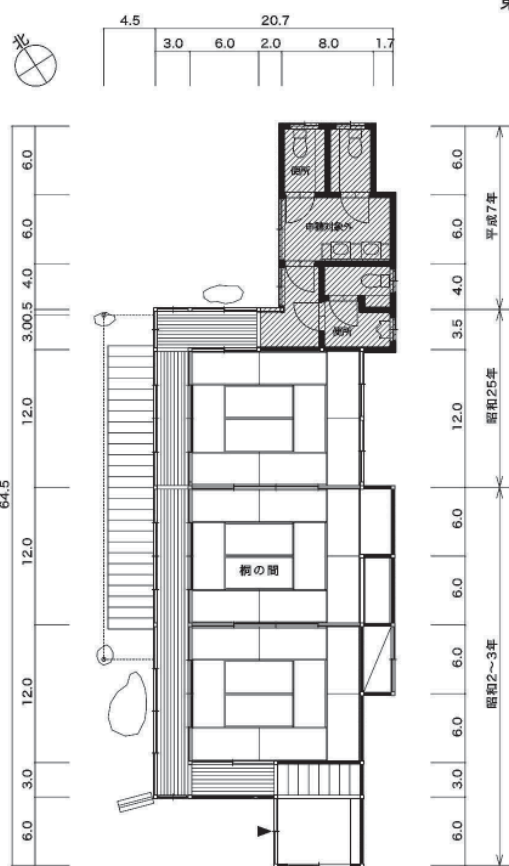
南棟 平面図



1 階平面図 S:1/200 (単位:尺)



東棟 平面図



1 階平面図 S:1/200 (単位:尺)

